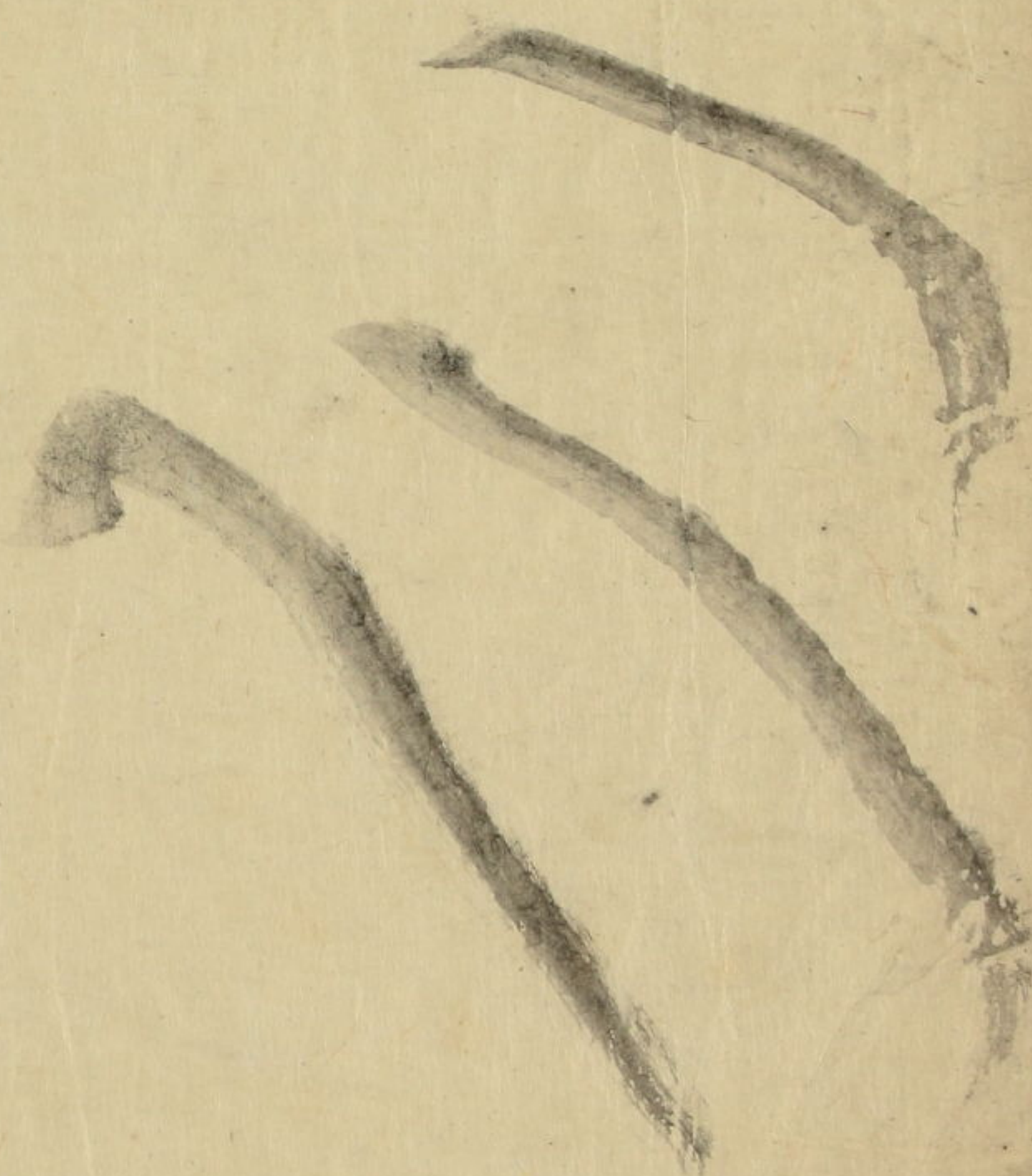


索引 蔓 自序



俳諧の書いふ一より少くは多し
少くも附合乃意味もあつたふ書籍の
少くはわきまなくあつたゆゑに
懐徳の人々會一席をこのはたき
議論をせしむるをさしりては
自得勃破一すめく俳諧をなすべし



さうしと不幸に……事口受をく……命を
は事として自己の誤を正法の便やかく却る
他の癖論惑説を……病を……乃……
あ……師を……は……
修……自然と……
あ……凡……師を……心
師……造化を……揚……能者も

……又附合と……古ハ連哥の
法式を擬……
古風乃格調……芭蕉……
繩墨を……俳諧の附合と……
……興……上古乃連……
……古風のもい……
近……蕉門乃附合……

支流の中へくくして門戸を建己う好み如く
是より其好むところ一概めて或はみな
一粟を以て向上乃一海を以て安んじハ
山崖を以て老成乃いりりとは其の意旨
廣くくまると謂つる一然も大概蕉翁
一世に集む鑑とて志を不傲ふものこ
れも其規則とすや十七條廿五條

或ハ七名八体うやむやの関名の事によつて
漢少とて墨子、練絮、泣揚子の
岐路、迷ふの徒、少くは故ふこの拳
子乃至今や此篇現在に作者の句を以て
古來其名目より引用し又をみりて
作するももうい海く句を以て連続
乃趣を志めし加ふる古人の句を以て

と色適意之令修るものをもこれを用
中々社中乃初心輩に附与乃心澄紙
示はるありて他門より向て論争る
うはるるありて

表半亭几董稿

古来名目

并私説

○癸句 天

○服 地

○才三 人

○癸句 起

○服 兼

○才三 轉

○才四 合

○癸句 客

○服 主

○才三 相伴

○才四 庖丁リヤウテイ

私說

○癸句 有心
○服 有心
○才三 會叙

○才四 逃句

○癸句 景氣 或向
○服 景氣 或向
○才三 人情 或手前

○才四 人情 或手前

○癸句 人情 或自
○服 景氣 或他
○才三 景氣 或他

○才四 人情 或自
○才五 人情 或自

○癸句 景氣 或用
○服 起情 或体用
○才三 人情 或体

○才四 景氣 或体用
○才五 起情 或体

右

古来名目五照

○相對

○比

○對

○打添

○打着

同 附物趣向新古之差別

○涼 川端 古

拭椽 中古

鶴脚 新

○暑 小松原 曰

絛縮緬 曰

笠鷺 曰

○寒 醉醒 曰

竈塗立 曰

塩鯛 曰

古入曰 物

一 照ハ韻字留定ハ法トモク

後句よりそふ事あるも平

もやそり後句ふひれせし山川草木

も歎乃其心をまて後句の景情を増

そあ

古入曰

一 照ハ字留てそのハ是も歌一首乃

こく一句詮とてんあはれとよく番と

く一首のこころを眼の涙にまじり
けし境を志すべし

古人曰
一才之ハ発句一平句一何句
一何句ハ発句一平句一何句
一何句ハ発句一平句一何句
一何句ハ発句一平句一何句

古人曰
一才この苗と文字の定まる中一何句の
後句乃やうたは下の中一何句の
次乃句へ及ぶ事あるは理を志す時
ての字「ふ」の字も「は」も「は」も
されとは句を才とのさへ句の中一
ふも「は」も「は」も「は」も
ふも「は」も「は」も「は」も

世より中身の韻字を留りて傳受ありしを
或ハ初極或ハ杜絶をとりしを推字
抱字多し沙汰あるは志々ぬ人乃推字

私説

発句は起きしは眼子美く二句首尾一
より一その体ありて一句の論をたらし
されど口キの箇も韻字を承る

拍は尾調を眼の法に於て
中三を案又あるはめて句を起す如きと
既口キと云ふ前句にあり又後句と云ふ
亦越しあるは一轉しと意のいふ
ゆゑぬやうに志々も発句眼と二句
そ尾調いふを附出しくは
且中よりして承るくと連続する

一 宛たるれをぬり乃又字く意味あり
 さきハ才三の句を一喜のむつり記所
 とらひあて勿論口キ才之乃仕法をよく
 熟得すきハ附句ハ百句も千句も進ふ
 難なる事形ハちるふとらて照よとらむ
 才之あ一喜進ハ一喜進も尾も調ハ
 とらひ了一才ハ一喜進ハ二句乃附
 けりをよく修めして附句の自在を
 得るものこ

古来八体之名目

- 寄 ○志 ○觀相 ○打返
- 欺 ○前句乃情を押し出す句
- 詞をとる句 ○意氣

同 案方七名

○有心 ○向附 ○起情 ○會尺

○逸句 ○拍子 ○色立

同 附方八體

○其人 ○其場 ○其時 ○天相

○觀相 ○時分 ○時節 ○面影

同 三体

○有心 ○會釋 ○逸句

同 取響音五字

○份 ○感 ○香

○移 ○勤

同 八句之運

○見く ○聞く ○思く

○行く

私説

一前ふ自他体用人情景氣のわつちをもて
發句より分四句五句乃至各自一巻乃
連続四五句乃運ひ此法をもてよくたゞ
るまのちまじ或き巻中人情乃句をもて
景氣乃句を接ぐ又も景氣乃句を
りて人情の句と挿むかたはなほよく
て

是を信よ観る事よまことふて禁忌
も多し亦て事ハ人情二句景氣二句と編
筋を織ぐる如く一巻は連続する事
あり一巻はたゞの如しとてはなほ事
よ曲節の事一巻一巻景氣乃句出
是非二句對しそ次は人情起情の句
は
侍く一巻を信し一巻は法をたゞ

人情二句對——を次二句と見ざる時ハ彼
向附乃法をとりて自他を分ちて人事
四句も五句も続けゆく——さうと乃
曲の即を用ひまらんハ一巻の眼目とする所
なまに似たるも既古集とて人情五六句
續むるも考つて見る——

又曰

景氣の句とつと見聞思行乃文字
あはれハ是人事と拍とつとあはれと
忌憚るるゆゑを句あもよるるはと花
少のひかしくき次とのふ句あを見聞と
清くハね——あはれとつと見聞と
附合穿鑿論——はれと一事の調子を
う——まはれ——句乃情あり作者乃意

あり景氣と見ゆる句と情の句と
情と見ゆる句と景の句と
よく見解し編みよきものた
昔物終双成拍をく地の詞と
をもと志流くふに附合乃一
とよまじり纏ると心ほき
かろく

右不承る私説乃お古人の糟粕
し事ある事採乃功なり
尤記とくあり古事
名目よめて句を引き解き
もてし事採るを加へて
手引乃要と次を採る能
能得練達乃

人忠の心も静かきものありて初学未
孫の流るもあふいさゝこの便あはむ
御心ふのこも御見よわらうと
詞をもて全編の意をささく
ゆくまじしとささけりやの

五段句よワキ附事

せきの羽もい流るひぬ初時節

ひとあさ風の木葉ふたの

及飛句初しうれハ野あまきさの

あまをこ板い流くらみ羽ときしう句能く

ワキハ

初時節し一吹風と附く板も葉ふ

つわつたきまの結ひみく志のすまじせし
うはくくらあそつとあをせまく一白は能く

是う打添とふふ服く

市中ハ物のよほらや夏の目

暑くくと門くの色

発句ハ夏乃月う懸く市中ら懸向みく
物のあらしときく懸向く懸乃月也お

あらしとむきさしるの句能く

服ハ

暑くくとつわつたきまの結ひみく
二句結問のあまねお市中とつとふ門く
とくははるまき色ハ物のあらしとつと人
射くははるまき色ハ物のあらしとつと人

是其場く

序も志のこゝろにまはるるは

酒志の智ふこのちから忠有

け登句ハ海川乃おと懸し一と接接乃

句と山と口キも接接の口キと是らハ

接接のとまよふよふ本なりね解ハ

此は接しに接序のねなりと海川

と序の静なり接しと接接なりまはるる

かゝるる序なりと接しと接し

うけと口キは日と酒を志あるたど

いの序なりハ接接と遠事なり接接

かゝるる接ハ接をすあるなり接しと

と接しと接しと接しと接しと接しと

序は事なりと接しと接しと接しと

と接しと接しと接しと接しと接しと

及弁句能居りしむすひもなむ

是相對とふ脇こ

某のそ如月をある日を西

山もときごとく降るが如き

けりキハ只粉骨もたふ句のやんはたぬ人

おれも句なりき神ももたふ句と玉振かま

こりキ之月をある日を西

某のそ如日能九七の時分とはるは十日

比るらん月もそ如らんらん出るあは

とらんらんあらんらん某のそ如のそはらん

およものもたふとふあはらん西らんあは

同歌^{カクシラケラス}はあはらんらんワキみはりの字を用ひらん

も振らんらんあらんらん一旬を東と西とらんらん

〇

十四

と歌体子山もくく附くか原もハ其葉乃
也の河くらし

是も亦添みく時分附く

牡丹あまも亦くまのりぬ二三片

和月廿日乃ありぬの影

祭句ハ牡丹乃濃美^ニたを影を体とく

やいふくろひくろ花の二むう之むう落葉
を亦まかりぬくくこの能と二三片とく
ふまはまもあまハ題の牡丹よえに
越向く　ワキハ

その対句を定めく和月乃廿日
くこの祭句の刃くくくくく影と又
時分を定めく牡丹のくくはあ

たゞく〜〜〜と明月の影のうつらハ
志うつらハと葉のこぼるるやうなときを
牡丹〜牡丹草と心ふとふとあつたらぬと
廿日とさ〜め〜と〜と〜ん〜は〜ワキ〜太キ〜ふ
句位をゲン減ゲるも〜とや

是打着と心脇〜と附き其時こ

イタノメをシねメ子雪のミチお路ノぬ

我ワ河カ〜とマ人ノ声ノき

癸ミ句ノハヒこトも〜降ツ乃〜雪ノおハたホ
初カ体ノこ〜子ハゆ〜方も〜と志を〜
イ〜ハ〜い〜〜降〜〜と地〜
立〜体〜も〜あ〜〜又〜ウ〜〜飛〜く〜お〜ん〜
さ〜ふ〜〜雪ノお〜ん〜〜と〜〜極〜向〜〜と〜

字が一句乃眼目^{ミヤクメ}とや 口キハ

此もイもウらまたれたる書のおもひらくハ
我もウらもいとくた又阿とくもたましく
みこしとともあしぬ書とやとすつあや
あうのつあしきまこさうあし^{カニ}を^{カイ}
句とあうとまハ声とあげたるの下田書と口キを
字苗よきとくつあしき^{カニ}の^{カイ}ぬるま

は句とまこさうあしきと詞をあしとれと
その上く苗りまをれと詞とかくつは二句
その尾とく^{コツ}と^{ズイ}は合とく^{コツ}と^{ズイ}
とく^{コツ}と^{ズイ}ぬるまとく^{コツ}と^{ズイ}合とく^{コツ}と^{ズイ}

是も相對乃口キぬく附ハ有心と

あまもさう月骨^{コツ}髓^{ズイ}入^{コツ}と^{ズイ}

杜句老杜ハラクダの老ハラクダ腸ハラクダ

あまの月は光りツキのまゝとあやうらうら
あやうらみ枯きツキ一本ははくくとあやうら
たのしみ趣向ツキうらう月のひらうらうら
うらうらや那ツキあやうらうらうら
あやうらうらうらうらうらうらうら

ワキハ

あまの月は光りツキのまゝとあやうらうら
あやうらみ枯きツキ一本ははくくとあやうら
たのしみ趣向ツキうらう月のひらうらうら
うらうらや那ツキあやうらうらうら
あやうらうらうらうらうらうらうら

次韻乃俳諧

詩の足雉脰チシ長く継ぎへて

這コノ句ノ以モツテ莊ソウ子コ可レ見ル矣

是を作例ふ〜く志〜とのそ

一或ハ古人の発句を〜互〜照より附〜め〜
た〜俳諧ある哉ハ臥ハ照ハ起りといふ

花のほや〜ある〜五目ある 古人

その花ハ人ハさる袖の春雨

け爰句ハ〜やハ心ハ〜く〜は白〜
よハ〜四五日も〜ある〜け〜
四月ハ〜花ハ〜花ある〜
は〜と花の〜は〜を〜
おもひ〜一句の〜五目〜

心しき事

又後志の句たしむくま後ふり句を
神録とさく下り御乃字を志す後を
叔ワキと後想のぬしき次くを
つちかひきても祭句を神の句と心ゆ
ワキよこ心は用ひく後とそく是も

先ワキ起リ口前又夢想祝言奉納の
教よハ祭句乃苗りよりワキ乃以字ふ
五音相通十韻連聲など用ひく附家
事ハま時の宗匠乃意よ何とらよ

発句歌よ分三附事

重岩やけしき藤もよつ事
石をめでたしはあすし乃松

海士乃子々録を告る貝吹て

癸丑句ハ炉邊ニ旅人をとりてたす体る是ハ
口キ亦遠く庭の事記を附きり
叔才三ハその二句は向ハ一ニ絲を告る
貝を以て言の字ゆると他より事と起
て前乃句を海邊乃旅人と刀は之に附
しや外々事起し一とゆく由
轉してある

是向附

本のゆりてけも餘をけり
西日乃とくまよとて天の事
旅人の風うまゆく事

癸丑句ハ是乃もとて遊ひてけり
よとて系色紙賞歎し一も亦遠く
西日也閑まもあふを定るとい流し

口キニ 久々乃ひうりのとけきまの甲
 去りうらなく 意乃ちるらん
 けくを照し合さく 見せハいよく
 おもろぬ 相才之ハ西日とつひ中実たる
 去る氣と 時節よく 情を起して 旅人よ
 越向く 風搔ゆくと 地をもめ 姿
 何ハ 春と似ると 季節を動さぬ
 よく附くよ 亦是等々の百句は甲よ

背くも才之と 入る句と ありて
 け教句たハ正しく 人事うりて
 景と氣を詮み 句ニ口キハ 兼
 去り 句 形事と 才之を 延して
 いてハ 却る 入る 句 口キ
 去り 句 形事と 人を出し 抑え
 やま 句 形事乃 附く

啼くも風を吹く空を穿て
鳥帽子を垂す梅ひとむ

山を焼くぬきくはる巻括て

爰句ちま風を吹く空を穿て
服を脱ぎて起し爰句ちま
鳥帽子を垂す梅ひとむ
と場を赤縁の縁に板才之
人をもとめく離宮たぐく
おきひよきく

清々廉すくともふ附くは才三一句の作
つし趣向のとり不上手に修く

是其人乃附く

温石さめくはる巻括て
おきひよきく

けは乃外とり志む海山ふ

け爰句ハ其角う翁を葬りもる哀傷乃

吟こけきまをうけく温石さめくと
つひ皆氷る色と臨門人乃 影腸を
述るもの死才三一轉く旅泊を跡
半ふふちりくわきの一体をきおふ
ゆゆくはまふふはく趣向をくふより
たつむ海山くく二句の能き中ふも扱こ
是附ハ舎尺と
あまのこけきも
有心なれをこ

やうきくもまのあおのこけき
本槿乃 外も垣乃 間引 菜

新乃 魚 都 八月 不用 ちん

発句ハ 秋風よ 破さるる 芭蕉を あまのこけき
くまのあおのこけきと 能きく 本槿の垣と 場
をよせ 合さく 間引 菜と 洒落 せり
一句の能きく や 初才之垣乃 外面の菜を け

少少の場々一人情紙起してあつと
通ふ海をさすもく スナドリ 澳でくまぐやが部の
かゝるそと目のおおと用ゆるんと
遠く思ひやうと句こころもく才三の
あり乃て句へ及まおとむまを合点
くのと

文字笛才三の事

案月や鶴のはくく並ひるを
その乃お日乃あまれにり

桎擔山家乃体を木葉降

爰句ハ鶴のイニ並ひあまき
タレ、反

ワキあまれにけつと云をまして
韻字
くく笛さるよりよく細く
此才三
笛うよあはのくくハ三句乃わたりおき

ろくたひそ敷句新月やとひいワキ
を乃新白と出たり^{カワ}二句一意のめく
そ尾くそ才之は附合まふ白ひもま
不^カは^カの^カく^カふ^カと^カ新^カ白^カく^カつ^カ字^カよ^カた^カより^カ
櫻^カ捨^カく^カふ^カ常^カ盤^カま^カと^カあ^カら^カひ^カ山^カ家^カの
体^カと^カ木^カ乃^カ紫^カ障^カと^カ一^カ句^カく^カ姉^カと^カめ^カる^カさ^カ
ま^カハ^カ才^カ之^カの^カめ^カり^カ成^カ備^カく^カ留^カり^カも^カめ^カる^カく

三句乃櫻捨もさく調へり櫻捨くく
下^カも^カも^カ紫^カ障^カと^カつ^カく^カ心^カを^カ用^カる^カさ^カの^カく^カ

卷中連絡の事

前山田乃小田の子稻を刈比

夕月子かゝれそわくそ四十雀

是ハ景氣を延きとつし附かのかの八俣日

時節く

夕月よ、、、、、、、、、、

秋をうきひてさるり戸子倚ヨル

是起情之前句の、、、、、、、、、、人情を向を
、、、、、、、、、、附ハ八体子白観おえ

秋をうきひて、、、、、

目塞フクく苦き茶心ツバ吸ハクく

前句秋を愁ふる、、、、、、、、、、戸子よ、、、、、、
とぬ、、、、、、、、、、と、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、

附ハ八体子曰其くと

目よ、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、

隣ナリよ、、、、、、、、、、油アビ

是く情之句よりさる附く前句よりさる人の
用くさ用くささるくさ由を解くもさるくさ拍の
み注る事さるくささるくさ用をさるけさ
及句より油よりさるくささるくさ一句の能さ
疎ふくくささるの事さるくささるくさ
是七名より白向附く
疎ふくささるくささるくささるくさ

三尺つらさる音の事さるくさ
是ハ油よりさるくささるくささるくさ
三尺積る事さるくささるくさ一句の能さ
是七名より白向附く
三尺はさるくささるくささるくさ
餅コ餅ウ餅ユ根さるくささるくさ
鬼イ脣ヅ乃妻の只なさるくさ泣く

是前句ハ三尺乃雪と云々餅も飢るケタモ 黙シ
趣向は付く日多しと云々と云々句
此を結ぶと云々や次乃句ハ前を拈人と
云々其書を向ハしと云々鬼唇と云々趣向
ハ拈くつの上と云々只法はふくと情を起し
と云々商を交る教生と云々と云々扱身も
付やふかたつと云々ね扱も歎ハしと云々

と云々ひらり前をとりと云々泣くある体は

是前句を吟みしと云々情の向附と

いづちの書ありと云々

カ子# 種傳ある花のみと云々に接する

是も人情之句はつと云々と云々の人ハまこと
前句のつと云々と云々と云々の用と自みと云々
付と云々と云々扱一句は趣向といづちと云々

支離^{カタワ}乃女を足^ツの^ツく^ツう^ツま^ツ世の^ツ申^ツも^ツあ^ツは^ツ
 果^ツく^ツ交^ツ有^ツ乃^ツ罪障^{サイヤウ}消滅^{セウメツ}乃^ツあ^ツは^ツ障^ツの^ツ供^ツ養^ツ
 小^ツあ^ツり^ツえ^ツ難^ツを^ツあ^ツり^ツて^ツ尼^ツ子^ツ成^ツと^ツふ^ツ意^ツと^ツ
 ね^ツ始^ツ句^ツま^ツへ^ツハ^ツ花^ツの^ツ定^ツを^ツあ^ツり^ツて^ツ是^ツ非^ツも^ツ
 花^ツ乃^ツ句^ツま^ツへ^ツハ^ツ花^ツの^ツ定^ツを^ツあ^ツり^ツて^ツ是^ツ非^ツも^ツ
 情^ツ起^ツし^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツ
 是^ツ非^ツも^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツ

ち^ツ人の^ツ情^ツを^ツ附^ツの^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツ
 一^ツて^ツ花^ツを^ツよ^ツせ^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツ
 う^ツか^ツり^ツて^ツ山^ツを^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツ
 と^ツ余^ツ情^ツ一^ツつ^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツ
 付^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツ
 大^ツき^ツか^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツあ^ツり^ツて^ツ

是^ツ案^ツの^ツハ^ツ七^ツ名^ツ有^ツ心^ツ附^ツハ^ツ其^ツ人^ツと^ツ

清浄ある花の、、、、、

喜結ゆく糸乃西よ切ふく

結雪後の弦きう波むをらうふ

是前句と清浄ある花の、、、、、の夕暮と

之の、きふ、附流、、、、、前句

次ハ西よ低くつ白を、、、、、西海、、、、、

一、雪家乃面影、附、、、、、やまのり糸

と、ふ、、、、、を、か、と、白と結ひ、、、、、前句

乃、横、端、を、合、と、と、つ、あ、の、一、や

是、糸、糸、糸、流、を、附、ハ、八、体、白、付、と

○

前、日、ハ、さ、一、ぬ、く、又、あ、る、降

又、一、糸、の、見、福、介、出、よ、堂、侍、養

是、前、句、日、ハ、さ、一、ぬ、く、又、あ、る、降、の、う、は、と

ゆくも一葉のねを堂侍の場とありあは
はるる照あしやねる一恵のくふらねく見
そふら見のくふ侍の義式はなありよ我
しひまこ出さくこふんふめいやどくは情と
起しそ移り出さくこふんふめいやどくは情と

是七名は曰起情と

見一恵の見、、、、、、、、、

はるる一葉のねを堂侍の場とありあは

是前句乃見侍人女に一葉のねを堂侍の場とありあは
はるる照あしやねる一恵のくふらねく見
そふら見のくふ侍の義式はなありよ我
しひまこ出さくこふんふめいやどくは情と
起しそ移り出さくこふんふめいやどくは情と

婦くつらねまじきと一句の他へさめりや
人懐ふこところりひきぬけりあはれと情ハ
こほりさへ句へ

是一句の自他のる有心附く

はかりよはちたるとりりりり

いさよみの暗なむかき世のいれき

は附くことよく味うて見るとよいかくは句ハ

児移りあふことうそく只をけり物結くそめり
乃そそおほきことうそくさう人と附く一句の
お返りとさきさきと其くく向かへて晴さひま
さく世のいそねとくうそくとあき髪よめあり
く件をあへりく物へや世のいそねとらふ
くく三句の輪廻をのびくく世乃字うたふそめ
是前句乃情をpushもあきと日附みく

又時分をばくめく轉く

十六おのころ

志ころうのたおま場松り

志ころうのまめくこま場松本は津とせ

乃橋と附ぶさうまの園く世乃いそ

しつととあそく暮砧ホチニイ急イハレたどのおもひ

砧を附おとけくもくもる金とん

是八俣よ日其時節

志ころうのた

駕昇の持廻りぬ秋乃雨

前白乃場と見はくめく駕昇と銀向

持廻りぬハ前白移をとりそ

くや娘のあハ季節のあくらみ

二白乃よそほ

是八体五白三揚々

加る解一の榊組、く、く、く、

若も鳥もたつらう向あつる

是八体五白逐句と四五句の運びとく、く
ま、く、く、く、堂供も食の句とあ、く、
既くさつらとく、世乃つとま、く、く、く、
と揚々とく、先加る俾とく、人張出、く、皆

人儀の体用あ、く、く、ま、く、く、
く、く、く、
あ、く、く、向、く、く、
く、く、く、

是三体五白逐句と

○

前句 喜形のく、く、
二乃尼乃道な、く、
二乃尼乃道な、く、
二乃尼乃道な、く、

是前句を昔をぬりてくおとひめて
たゞ紙をくぬりてく体をかぬり
る人々の今ハ世を造りてく都迎
るりて候るありき南く足ぬりて次を附
く物や 附ハ其人と

二乃尼のをまゝくくく
七ツ限乃門 設くたる

前句尼といふと寺と慈向をまゝ七ツ限
門をとまゝくくくく一旬能化

是ハ體よりまゝ場
唯くく外の
情をたゞ

七ツ限乃門くくくく

雨のむらふ^ス救^カの^カ釋^カや^カお^カく^カり^カま^カぬ

前句七ツ限乃人を通さぬ門とつて對
て軍用乃糧と慈向く物と雨の間

ととと一句の能くある

るのむまふ、い、い、い、い、い

弾ツツミたーむ能く酒人

前句乃救軍を軍子勢多氏浦人々と定
めく弾たくと操く用急せし軍中結
強きと能くと思ひよとくくく一句の能く
たると一句乃能くまふ句と前句の能く或ハ前の

海くくくくくくく一句くくくく
け一編おほくく一句能くくくとあくとく
くくく考くくくく

弾きくくくくくく

女振乃海くくくくくく

前舞くくくくく人氏轉くく振く
物物を定めくくくく海くく振く一句

情とまをせりん返るく涙を梅るう一句
乃能し

是案方ハ有心とて附ハ生類乃會尺し

女梳乃、、、、、、、、、、、、

慈顔ヒか、、、、、、、、、、、、

前句乃、、、、、、、、、、、、

拙と見えモウハケお好ナたふお怒ナるヤ文女也

趣向ヒ一慈顔ヒ髪ハのみ、、、、、、、、、、、、

一句乃能あ、、、、、、、、、、、、

髪ヒ髪ハのハ、、、、、、、、、、、、

多くお、、、、、、、、、、、、

是も附ハ起情と 前句人情ナキユニ

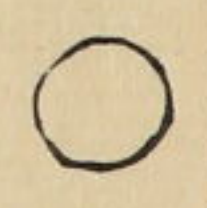
福ヒ、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、

前句乃人をさし〜といふ〜と語氣込
る〜返すかた代他〜か〜はを念
對〜付と押や或難〜て曰け一句及元語
より自のゆに云も〜よ〜め〜んと苗〜か
所従〜りさ〜ぬ〜詞る事ハ二句〜自他
ありと答伐〜よ〜と〜自方もおん
つ〜ぬ〜と〜よ〜と〜め〜んと

せ〜と起る假借の付句よらんと〜る〜ハ
心〜と〜ん〜と〜ハ彼中古の連〜や古風
乃〜と〜い〜と〜と嫌〜と〜

是前句乃詞を〜と〜
向附〜



前 歎痛を〜と〜
日〜

鄙人乃妻よ〜と〜
詠の事

前句を乃目のぬくくと暖ふふ公中樂
むゆもなく既もあきくウツ昔シヤウ懐のくく見
のそく修徳お女するの田冬をあるは流石さぬく
きを死ふへ連らぬく去るヌ結中乃体こ
是附ハ甚人より王昭君するの侍
鄙人のめふ、、、、、
水より流りし酒屋一軒

シウリン 善神の棚はお所のナリ新帝と

前句ハ赤あし流旅体と其場を附く句は
越向々流水より多くの家乃流きし中に
川より新流りし酒屋のある体なり
次の句々々を流るは現在をよしと夜明
かふふやうく水も川おさまりさるふ流き
流りし家居乃さすしと刃返るに遊るを電

前いづろ花白し山吹乃後

むろ面の垣植をるはあまき

ニツよるそんえはあまき

前句ハあしつは茨山とてくまよせ垣と

結ハむろ面を一句は越向ふく雨降る時候の

都合は次乃付ハ起情之前一句は雪氣を延

しあまきとももく人情は向リ後也

る名由り一延をさそむとつあつ白紙の結ハく

垣を飛越すとあつりそそく投るや

是七名よふ柏子生

ニツよるそんえ

西國のち形うけ名小日結

前句延をほあまきつあはとのあまき小

う結体も西國問屋かとの名か

おもむきありて附く

是其場也

西玉乃多能く

かろく其葬の足るやまひ

前句同金のおきて口乃日多母からとらふて
其葬とてあつたては、秋の足るやまひと
せしむるを、とらふてむまひと一旬

乃能く、はれ

是時分附也

ちのりき葬の、、、

片側ハ、川流る秋の風

前句の一体とて、はれ、秋の葬る、
片の町と、秋の葬る、
くおあ、はれ、は月比の文、

起二句乃らるり 起情を

是時候乃景色附之

片らりて中川、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ

月乃おとろのまきま稲妻

前句中川乃秋風と云ふ時能を又ゆえ

月乃おとろりと秋風の稲妻の音なきなり

一、巧き起と中流へ 起句の句能を

是八体よ曰天象也

月の起るハ、ハ、ハ、ハ、ハ

作きかんく人か車流り也

前句乃涼を云ふと云ふ秋の起るは

一、以て体よ系持し かく車と起句を定む

あとのまきくハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ

是前句の感をも法を附ハ起情也

作まらんくゝゝゝゝゝゝゝ

今やお國の碓^{ツタ}の山^{ヤマ}に

前句人形^{ナガシ}の車^{クルマ}とつゝあをあや^{アヤ}と

とつゝの君^{キミ}たも^{タモ}と盗^{ヌス}出^デす^スと^ト報^{ウラ}向^{ムカ}は^ハと

お島^{シマ}乃^ノ碓^{ツタ}の句^ク作^{ツク}と^トも^モた^タや

是前句乃^ノ情^{ナガシ}を^ヲ押^{オシ}出^デス^スと^トも^モ附^ツく

今^{イマ}やお島^{シマ}乃^ノゝゝゝゝゝ

涙^{ナミダ}の^ノ小^コの^ノ眠^{ネム}の^ノ川^{カハ}

碓^{ツタ}乃^ノ花^{ハナ}の^ノ初^{ハジメ}と^ト共^{トモ}

あゝの句^クと碓^{ツタ}を^ヲこ^コと^トあ^アと^トあ^アの^ノ人^{ヒト}を^ヲ女^メ

と^トあ^ア返^{マゼ}る^ル涙^{ナミダ}の^ノと^ト越^コ向^{ムカ}と^トあ^アの^ノ人^{ヒト}

叔^{オコ}阿^ア修^{シュ}羅^ラの^ノ比^ヒ倫^{リン}と^トあ^アの^ノ詞^{コト}と^トあ^アの^ノ事^{コト}と^トあ^ア

か^カの^ノ酒^{サケ}吞^{ノド}ま^マま^マ子^コお^オと^トあ^ア昔^{コト}の^ノ盜^{ヌス}賊^{ゾク}の^ノそ^ソら^ラ

の^ノ歌^{ウタ}を^ヲあ^アと^トあ^アの^ノ人^{ヒト}と^トあ^アの^ノ事^{コト}と^トあ^アの^ノ事^{コト}と^トあ^アの^ノ事^{コト}

おかたのほめかたもく〜次は物のこほ
 ちるは酒を酔ぬてうまき森入る
 人の枕もなぶる寝屋のけさ様乃志の
 と我らひを越へて附ての〜や相
 前白子眠をて寝て〜は女ととの
 ぬる〜懐ねる〜は〜は〜は〜は
 こめの毒よ〜は〜は〜は〜は

か〜るよもこ公おゆら〜は〜は〜は
 附て功者の〜は〜は〜は〜は
 けや〜は〜は〜は〜は〜は
 そのまき女骨折る〜は〜は〜は
 公〜や〜は〜は〜は〜は〜は
 白〜このまき味を〜は〜は〜は
 乃よいのを〜は〜は〜は〜は

右以上連絡の解ハ概すものなる
二卷より撰むて引用を全篇ハの
集証照し合を以て考る

名所地名遠附乃事

前ふ紙の部の連絡をみる
著る大はく之井の隣り

又

いせの事終も忘れらる

難波江の風むくを月夜舟

附くをたぐくをんを物じやどらるぞ一ツハ
号一ツを記す

○ 豊直語乃事

海棠乃花志乃限 皿

花の陰は海棠の枝まわりちり

前句ハ海棠の志を根四よ志わりとも葉を
後句ハ花の陰は海棠乃枝を勢ちりとも
ありさるゝおハ海棠の花あきとつひ陰を
海棠の葉枝をひさの陰とつてハ根を
つらふの樹こそこゝ正花をばりて
からとく海棠をちかりぬ

一句乃中に花の字様の字をきよて句も花と
様とをひひの形ぬやうていふ事と
正志よぬこまとり

世乃花よおとけく一本山さる

是世の志ハるまに山さるハ現象と

乃ぬる花乃山口をのけちる

是花の山ハ俤し初さくらハ我らひこ

又

花のほろろくも世を志のあり

世を志つゝの人 群るま

之助の志の盡かよふに所とて遊山一とて種ハ
いふも太平の法代ことつゝとて句の後句と
世を志つていふも世を志の代は志の
なりとて世を志する人 群るまとて返一

て民の解ひを附とて拍とてやま川もけ句ハ
あけ句おきハひよとて世を志を用ひとて
○初雲の月より秋之句は世を志の代は
うつとて世を志花前秋の句は世を志の代は
事なり

露 雲 雁 麻 相撲 ちよの歌ひ

秋のも世を志の代は世を志の代は世を志の代は

むすひの白くくはく

又きの白くきを附ゆきし只月とつり
あはれ白く他の季を附出くゆくるハ
前白きよく月過く季の節よき理の形ま
やうくあはくはく

○花前子名月也

其角集花摘乃巻中

名月日くく酒むく人

かくや姫くきくやま花あけく

前白酒むく人とつり俗くつり坂道を
移りゆき人をむくくはくよのく日よと
上よきくくくね名月くかくや姫きたけり
物終りく月すめ初月は都よりか天人
あはくあはくくかきや姫をく

五二
たもれらと帝より二人のぬきまをせハ
はきききりしゆあくても終に羽衣をすきき
車よりしりて天上せしゆりきゆを花より
てしと一白少ゆるしききしききハ仇詰り古今
未る者乃附白ゆく思事けり後より
乃少く起事あまのききよくて教達し下

ある日他々の友人事ありて附合のせいのいを催
きしりしり乃小冊子を出ししけしにきききと
見しりしゆきりしゆきききききききききき
かきききあまのききききききききききき
い乃きききききき他んを惜しきききききき
いしりしりき余はききききききききききき
たしりしりしりしりしりしりしりしりしり
たしりしりしりしりしりしりしりしりしり

了る事(抄)抄事師に傳へく伝誦と云ふ事(抄)は
抄く郷を傳へく事(抄)を(抄)の(抄)に(抄)に(抄)に
深く(抄)の(抄)に(抄)に(抄)に(抄)に(抄)に(抄)に
師曰け稿や必地見ふ(抄)に(抄)に(抄)に(抄)に(抄)に
議(抄)誦(抄)の(抄)事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執
行(抄)ふ(抄)に(抄)て(抄)ん(抄)事(抄)を(抄)ふ(抄)事(抄)の(抄)事(抄)と(抄)故(抄)に(抄)抄(抄)を
み(抄)る(抄)に(抄)事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執(抄)行(抄)す(抄)事(抄)を(抄)大(抄)事(抄)と(抄)い(抄)ふ

志(抄)の(抄)事(抄)を(抄)余(抄)に(抄)今(抄)蕉(抄)門(抄)乃(抄)伝(抄)誦(抄)事(抄)に
行(抄)ふ(抄)事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執(抄)行(抄)す(抄)事(抄)を(抄)大(抄)事(抄)と(抄)い(抄)ふ
五(抄)指(抄)と(抄)云(抄)ふ(抄)事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執(抄)行(抄)す(抄)事(抄)を(抄)大(抄)事(抄)と(抄)い(抄)ふ
事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執(抄)行(抄)す(抄)事(抄)を(抄)大(抄)事(抄)と(抄)い(抄)ふ
事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執(抄)行(抄)す(抄)事(抄)を(抄)大(抄)事(抄)と(抄)い(抄)ふ
事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執(抄)行(抄)す(抄)事(抄)を(抄)大(抄)事(抄)と(抄)い(抄)ふ
事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執(抄)行(抄)す(抄)事(抄)を(抄)大(抄)事(抄)と(抄)い(抄)ふ
事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執(抄)行(抄)す(抄)事(抄)を(抄)大(抄)事(抄)と(抄)い(抄)ふ
事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執(抄)行(抄)す(抄)事(抄)を(抄)大(抄)事(抄)と(抄)い(抄)ふ
事(抄)を(抄)師(抄)に(抄)傳(抄)へ(抄)く(抄)事(抄)に(抄)執(抄)行(抄)す(抄)事(抄)を(抄)大(抄)事(抄)と(抄)い(抄)ふ

三十棒を交へて一ひらきひらき
梓ゆふ乃ち作るものね

汲古堂佳棠誌

天明丙午歲正月廿五日

汲古堂新刻俳書目錄

附合手引蔓後篇

近刻

芭蕉其角嵐雪点印論

桃音二十歌仙

蕪村癸句集

初篇

ちりすり二哥仙

續一夜松前後二篇

新雜談集

和漢木屑籠

近刻

一書四奇仙後篇

近刻

花洛日之紀行

近刻

其角十牛圖面賀

近刻

蕪翁終焉記

平安書林

井筒屋庄兵衛
田中庄兵衛

21/10

